

「立ち止まり対話するための助成金」AKBN ファンド[通常型]

第3期助成事業振り返りインタビュー（ふくおかFUN）

2018年度から助成を行っている、立ち止まり対話するための助成金「AKBN ファンド」。その第三期目[通常型]の助成先である「ふくおかFUN」の大神弘太郎さん・大神愛子さん・大江由美さん・平山彪悟さんの4名に、助成終了後の振り返りインタビューを実施させて頂きました。聞き手はAKBN ファンド第三期当時の選考委員であった小森さん・大倉さん、そして職員の永田・雪松です。

提出された助成事業報告書と併せてこちらで公開し、助成金の原資を担ってくださっているアカツキ会員の皆様へのご報告とさせていただきます。



一 助成金を活用した「立ち止まり対話する」取り組みの中で、当初予想していたものと同じだったこと、

逆に、予想と違った・想定外の出来事があれば、教えてください。

大江「最初は、私と平山の2人が、プロジェクトリーダーとして成長していくことを目的に、他のメンバーはフィードバックとフォローとして関わる予定だったのですが、**課題を深掘りしていくうちに、団体全体の雰囲気を変えていく必要があるのではないかということになりました。**想定とは違う流れでしたが、全員で思っていることを言い合う機会になったと感じています。」

平山「自分は新卒でこの団体に就職したのですが、他の同世代の友人より、遥かに濃密な一年を過ごしたと感じています。大企業であれば、周りに合わせて行動すれば良いかもしれないところ、少人数の団体は一人一人が考えることを求められます。大変だったけど、内側を見直し、自分の気持ちを出せた日のことははっきり覚えています。」

一 お二人が、自身の「リーダーシップ」についての目標を立てて取り組んでいましたが、

皆さんにとって特にしんどかった／頑張った時期はいつ頃でしたか？



大江「多分、それまでずっと活動の中で、誰かの目線や声を気にして、そこで溜まった感情が爆発したタイミングが11月にありました。自分の中では初めての経験です。それによって相手を傷つけてしまったと思い、後から、あんな言い方してごめんね、と、謝りました。」

平山「8月に、**自分の中のリーダー像と期待されているリーダー像を洗い出すワークを行った時、実はそこに差異があることがわかりました。**努力で変えられるところはあると思う一方、元々の性格や気質的に合わないところもあると思い、見えない敵と戦っているような感じでした。」

一 立ち止まること・対話することがどれくらいできたと思いますか？5点満点での自己評価を教えてください

大神（愛）「立ち止まるが4・対話するが3です。正直、ここまで立ち止まることになるとは思っておらず、自分の想像の範囲内で考えたことは違う次元のことが起きました。もしかしたら、私自信はこれまでまだ誰とも対話できでいなかったのかな？と思いつつ、ずっと仲間と一緒にやっていくためには、普通の“大人の会話”では出てこないような想いを出し合うことは必要だったと感じています。」

大神（弘）「立ち止まるが5、対話するは2ですね。**自分はこれまで『行動こそ真実』であり、立ち止まらないことを信条にしてきました。****しかし個人力から組織力に移行するには必要だったと感じています。ただ、今はまだ自己表現と傾聴で留まっており、相互理解や折衷案の模索に行き着けていない。対話のスタート地点に立てたというのが実感です。」**

— コロナ禍で色々な変化があったことと思います、この取り組みの中で、もしかしたら負担やマイナスになったこと、引き換えに犠牲にしたと思うことはありませんか。

大江「仲間と自分と向き合う中で、精神的に潰れてしまうかもという時期もありましたが、アカツキのお二人がメッセージャーなどでフォローしてくれたのは助かりました。」
大神（愛）「思っていたのと違うな～と感じたことはありますし、時間と精神的には結構な労力を割いたと思っていますが、この経験をどう生かすかが重要。無駄だったのか、必要な投資だったのかは、長い時間をかけてしかわかりません。逆に、簡単に手に入る良さは簡単に忘れられたりする、他ではできない経験だったと思っています。」



大神（弘）「トータルではやってよかったと思っていますのですが、自分自身の影響力の強さが時に暴力になり得るということを認識してからは、その引き換えに強い牽引力を失ったかもしれないと感じています。情けない話ですが、自己否定してしまうことや塞ぎ込むこともあり、新しい自分になる前とはこういうことかもしれないと受け止めているところです。これまでは、ミッション達成が全てだったのですが、メンバーの足並みやエネルギーはそれぞれと考えることができるようになりました。アカツキさんが、言葉を選びながらも、刺さるフレーズを選んでくれたと思っています。」

— これから事業を進めていくにあたって、対話をどのように内部化・継続していく予定でしょうか。

平山「部下を持つようになったので、自分がして欲しいことと、相手ができることのすり合わせを、対話を通じて丁寧に進めていこうと考えています。単に業務を振るだけでなく、まず部下の声や状況を聞く、その上で、自分が目標にしているレベルまで成長してもらうために自分はどうすればいいのか、それを考えるのがマネージャーの役割だと思っています。」



大神（弘）「あれから業務の配置・役割分担を少し変え、分業制を進めており、同時に週一で月曜の午前中、打ち合わせをガッツリ入れています。そして会議の進行は代表の自分ではなく、AKBN ファンドを通して沢山成長した大江さんと平山さんの二人に任せています。二人は躓いて苦しんだ分、たくさん人の話を聞いて、声かけをすることができます。しんどい時にはそれを自覚して、ちょっと距離をとって自分を守ることもできます。これからも、躓くことはあると思いますが、その都度、立ち止まって・見直して・修正していくことができる。そんなチームで有りたいと思っています。」

ふくおか FUN はもともと、代表である大神さんのリーダーシップがとても強い団体。AKBN ファンドに応募して下さった時は、少し意外な印象も持ちましたが、今回の取り組みの中で、メンバーそれぞれが勇気を持ってぶつかり合う姿に、アカツキの理事や職員が大切にしている姿勢と同じものを感じるがありました。

また、外部から関わるコンサルタントの行為や発言は、想像以上に影響を与えてしまうもの。基本姿勢は「聞く・待つ」であるアカツキでも、例外ではありません。何が組織とそこにいる人にとって「良い」か「悪い」のかは、短期的に、簡単に判断がつくものではなく、覚悟を持って向き合うことが必要なのだと、改めて考える機会になりました。

第4期からのAKBN ファンドは、敢えてそのコンサルタントの関わりをなくすことで、自団体だけの立ち止まり対話する取り組みを応援しています。変化や失敗を恐れず、現場にとって最も必要な仕組みを模索し、挑戦していきたいと思っています。